

## Split an Atom: ジョイスと原子核破壊実験

浅井 学

*Finnegans Wake* 第2巻第3章は主人公 HCE の酒場での飲み騒ぎを扱った章である。この中に「バックリーはいかにしてロシア将軍を撃ったか (How Buckley Shot the Russian General)」(338.4-355.7) と呼ばれている挿話があり、その結末は、353 ページ 23 行目以下の、より深い挿入部分で原子核破壊のイメージによって描かれている<sup>1)</sup>。この原子核破壊のくだりは、原子核を初めて分裂させることに成功した物理学者 Ernest Rutherford の実験を念頭に置いて書かれているのだが、これについては『フィネガンズ・ウェイク』解釈の早い段階で Breon Mitchell が注釈をしてくれている。『フィネガンズ・ウェイク』の各ページ、各行に詳細な注をつけた McHugh のこのくだりに関する注釈もどうやらこれが元になっているようである。調べた限りでは、原子核破壊実験のことにに関して、これ以降の研究でも Mitchell が言っている以上のことを指摘している人はいない。おそらく Mitchell がうまく説明しているので、それ以上誰も踏み込まなかったということなのだろう。しかし、Joyce のテキストと原子核破壊実験の関連については Mitchell が言っていることで訂正したいこと、そして、さらに付け加えて言っておきたいことがある。本論の目的は「バックリーはいかにしてロシア将軍を撃ったか」とラザフォードの原子核破壊実験の関連を再考察することである。

### ジョイス好みの糞尿譚

最初に話の見通しをよくするために、「バックリーはいかにしてロシア将軍を撃ったか」がどのような話なのかを説明し、問題となるテキストの

該当箇所を確認しておきたい。ほぼ決定版とも言えるジョイスの浩瀚な伝記を書いた Richard Ellmann によれば、この話はジョイスの父がジョイスに話した以下のような小話が元になっているという。

Buckley ... was an Irish soldier in the Crimean War who drew a bead on a Russian general, but when he observed his splendid epaulettes and decorations, he could not bring himself to shoot. After a moment, alive to his duty, he raised his rifle again, but just then the general let down his pants to defecate. The sight of his enemy in so helpless and human plight was too much for Buckley, who again lowered his gun. But when the general prepared to finish the operation with a piece of grassy turf, Buckley lost all respect for him and fired. (Ellmann, *James Joyce* 398)

いかにもジョイスが好みそうな糞尿譚なのだが、『フィネガンズ・ウェイク』の中でジョイスが語り直した話は、分量が増え全体にアレンジが加えられていて、『フィネガンズ・ウェイク』の文脈の中でその意味を捉え直さなくてはいけないというのは言うまでもない。

第2巻第3章に挿入される話の中では Butt と Taff というそれぞれ Shem と Shaun という『フィネガンズ・ウェイク』の中で重要な役割を果たす人物（主人公 HCE の二人の息子）に対応する人物が登場し、この二人の掛け合いの中で「どのようにバックリーがロシア将軍を撃ったか」が語られていく。タフが突っ込み役で、彼の言葉に促されながらバットが話を進めるが、なかなか肝心の撃つ場面が出てこない。これはちょうど元の話の中でバックリーがなかなか銃の引き金を引けないことと対応している。そうこうしながら話を進めていくうちに徐々にバットがバックリーと重なり合っていく（これは夢の「論理」で書かれたと言われている『フィネガンズ・ウェイク』の中でよく見られる人物の融合の事例である）、バットは自分がやったこととしてロシア将軍狙撃の場面を語る。

Yastsar! In sabre tooth and sobre saviles! Senonnevero! That he leaves nyet is my grafe. He deared me to it and he dared me do it, and bedattle I didaredonit as Cocksnark of Killtork can tell and Ussur Ursussen of the viktaurios onrush with all the rattles in his arctic! As bold and as madhouse a bull in a meadows. Knout Knittrick Kinkypeard! Olefoh, the sourd of foemoe times! Unknun! For when meseemim, and tolfoklokken rolland allover ourloud's lande, beheaving up that sob of tunf for to claimhis, for to wollpimsolff, puddywhuck. Ay, and untuoning his culot-hone in an exitous erseroyal *Deo Jupto*. At that instullt to Igorladns! Prronto! I gave one dobblenotch and I ups with my crozzier. Mirrdo! With my how on armer and hits leg an arrow cockshock rockrogn. Sparro! (353.09 - 21)

[大意] そのとうりだとも。本当だとも。もし本当でないとしたら！奴がまだ生きていたら俺は悲しい（奴がもう生きていないのは俺の仕事だ）。奴がそうさせたんだ。やつがそうさせたのさ。ええい畜生、俺は思いきってやったね。キルタークのコックスナークが証言できるさ。そしてあのオーバーシューズをがらがら鳴らして勝利の突撃をする熊野熊吉もね。牧場の雄牛みたいに大胆に、無我夢中で。Knout Knittrick Kinkypeardめ！いにしえの剣のために！人に知られず！というのも、俺は見たのだ、12時の鐘がごろごろと国中に響き、奴が芝生を取り上げて 奴の尻をきれいにしようとしているのを、奴の尻を拭こうとしているのを。そうだ、そしてズボンを直しながら、堂々とした尻で尻の音を吹き鳴らした、そうだとも。アイルランドに対するあの侮辱に対して！撃ち方用意！俺はおやすみといって石弓を構えた。狙いを定めて！鎧で身をかため、俺の弓で、矢のようにコックロビンを打つ。発射！<sup>2)</sup>

バックリーがロシア將軍を撃つ話は、言い換えれば一兵卒と將軍の“encounter”，すなわち出会いと同時に対立の話であり、この対立の中にそ

の他様々の対立のモチーフが重ね合されている。それは、アイルランドとイギリスの対立であり、植民地と帝国の対立であり、抑圧される者と抑圧する者の対立であり、また、コマドリと雀の対立、ドルイドとキリスト教の対立などである。そして、そうしたものの中で最も重要なのが、『フィネガンズ・ウェイク』の中でも最も重要なテーマの一つである年を取った者と若者の対立、父と子の対立、世代間の対立、であることは言うまでもない（『フィネガンズ・ウェイク』は大きく捉えれば世代交代の物語である）。

そして、世代の対立ということになれば、思い出さなくてはならないのは主人公 HCE の物語の原点、公園での HCE と Cad との「出会い / 対立」であろう。対応と融合を大きなテキスト原理とする『フィネガンズ・ウェイク』という作品において、当然「バックリーはいかにしてロシア将軍を撃ったか」は HCE と Cad の「出会い / 対立」を意識して書かれている。分かりやすい単純な例を一つだけ挙げれば、Cad は HCE と出会う時パイプを持っているが、バット / バックリーもやはりパイプを持っている：“he met a cad with a pipe” (35. 10 – 11), “my pipe for his cigar!” (34. 17)。また逆に、HCE と Cad との出会いの方も「バックリーはいかにしてロシア将軍を撃ったか」（あるいは Butt と Taff）を意識して書かれている：“Execration (excretion)” (35. 20 – 21), “plugged by a soft-nosed bullet” (35. 25 – 26), “tipstaff” (35. 27), “buttall” (35. 34)。さらに、どちらも時間が12時で (“it was twelve” 35. 33, “tolfoklokken (klokken tolv: デンマーク語で12時の意)” 35. 15), 雷への言及 (“the ten ton tonant thunderous tenor toller” 35. 31 – 32, “rolland (roll: (雷が) ゴロゴロ鳴る)” 35. 15) があるのも共通しているが、「12時」は新しいサイクルが始まる時間であり、「雷」は『フィネガンズ・ウェイク』の中で歴史のサイクルの更新を告げるものである。これら二つは、歴史の循環、世代の交代を大きなテーマとする『フィネガンズ・ウェイク』の中で特別な意味を持つ要素である。

このように、二つの話は密接に対応させられ関係付けられているが、HCE と Cad の出会いが、年を取った者と若者の出会い / 対立 (encounter)、歴史のサイクルの更新というテーマの導入部とすれば、作品の中における

その究極的、最終的な表現が「バックリーはいかにしてロシア将軍を撃ったか」ということになる（「バックリーはいかにしてロシア将軍を撃ったか」が書かれたのは1937年から38年という『フィネガンズ・ウェイク』創作の最終段階であり、創作上でも文字通り最終的な表現であった）。別な言い方をすれば、「バックリーはいかにしてロシア将軍を撃ったか」は『フィネガンズ・ウェイク』のテーマとモチーフを凝縮した『フィネガンズ・ウェイク』の究極の縮図なのである。

さて、問題になる原子核破壊のくだりは、より深い挿入部分として、この狙撃のシーンにすぐ続いて出てくる。

The abnihilisation of the etym by the grisning of the grosning of the grinder of the grunder of the first lord of hurtreford ex-polodotonates through Parsuralia with an ivanmorinthorrorumble fragoromboassity amidwhiches general uttermosts confusion are perceivable moletons skaping with mulicules which coventry plumpkins fairlygosmotherthemselves in the Landaunelegants of Pinkadindy. Similar scenatas are projectilised from Hullullu, Bawlawayo, empyreal Raum and mordern Atems. They were precisely the twelves of clocks, noon minutes, none seconds. At someseat of Oldanelang's Konguerrig, by dawnsybreak in Aira. (353. 23 - 33)

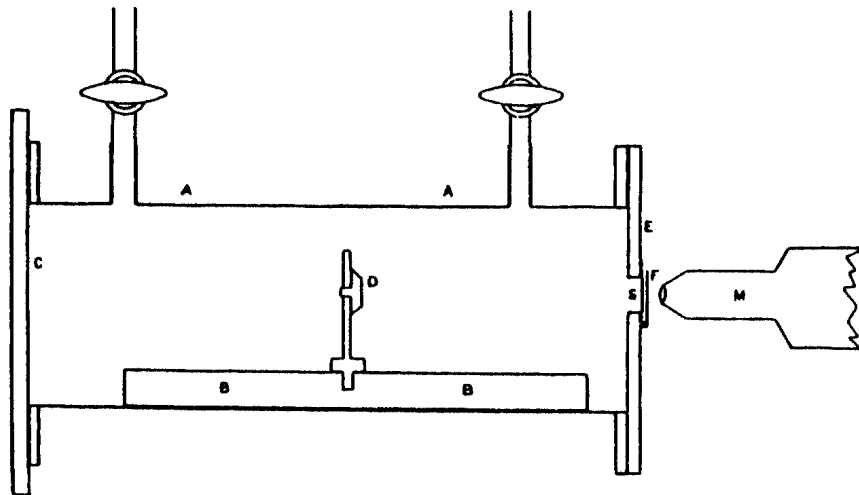
[大意] 初代ハートルフォード卿のすりつぶし器のすりつぶしによる原子の生成消滅が、パースネリア中で爆発的に生じ、大音響を轟かせる。その中でこの上ない混乱が広く観察される。分子とともに原子が逃げ出し（金づちが分子を使って創造し）、田舎者がピカデリーの優雅さで身を包む。同様な場面がホノルル、ブラワヨ、ローマ帝国、エジンバラから投射される。時はまさに12時、0分0秒。一日中続いた戦争の日没の時間に（昔デーシローの行われた王国のとある座席で）、エールの夜明けまでに（夜明けのそばで）。

とりわけ地口を通して、あるイメージに別なイメージが果てしなく重ね合わされていくという『フィネガンズ・ウェイク』のテキストの論理、あるいは、原理に則って、ここでバックリーのロシア将軍銃撃は、原子の破壊というイメージに変換され、それを踏み台にしてさらに広い文脈へと意味が解き放されている。言い出せばきりがないので最初の数語だけに注釈をつけておけば、“The abnihilisation of the etym”は“annihilation of atom (原子の崩壊)”とともに“annihilation of Adam (アダム殺し)”とも“annihilation of eymon (語の原形, 本義の崩壊)”とも読める。また、“abnihilisation”の最初のところを“ab nihil (from nothing)”と読めば「無からの創造」ともとれる。ロシア将軍の挿話の中でロシア将軍はHCEの化身であり、HCEはHaveth Childers Everywhere (いたるところに子供あり)を表すとも言われるように作中万人の父アダム(Adam)とも見立てられている。ここでAdam/atomの地口を介してロシア将軍/HCEがatomと結びつけられ、ロシア将軍銃撃の話が原子核破壊の話に変換されているのである。そして、その結びつけによってロシア将軍の話とこの原子核破壊の一節が、『フィネガンズ・ウェイク』の中心的なテーマである父と子の対立(世代の対立, 父親殺し)の話にほかならないことを再確認している。また、「語の原形の破壊と創造」という“etymon”の文脈を取れば、それは言葉の原子である語の原形・本義を意味の無いレベルにまで一度ばらばらにし、そこから再創造するという『フィネガンズ・ウェイク』の言語的構成原理を言い表していることになる。先に「バックリーはいかにしてロシア将軍を撃ったか」が『フィネガンズ・ウェイク』の縮図と言ったが、それを大胆に変形したこの一節もまた『フィネガンズ・ウェイク』の縮図なのである。縮図の中の縮図と言っているかもしれない。

さて、“etym”の生成消滅は“the grisning of the grosning of the grinder of the grunder of the first lord of hurtreford”によって引き起こされているが、ここにこの一節がラザフォードの原子核破壊実験への言及であることのヒントが隠されている。最後の一語“hurtreford”は“Rutherford”のアナグラムであり、ラザフォードは1931年男爵の爵位を得て、the first Baron Rutherford of Nelsonとなっているのである。

## ラザフォードの原子核破壊実験

さて、問題となる箇所とその文脈を確認したので、以下このテキストと原子核破壊実験の関連を再検討していこう。そのためにはまず、ラザフォードの原子核破壊実験がどのようなものだったかを知っておく必要がある。『フィネガンズ・ウェイク』の原文通りだと、“grinder (粉碎機, 碾臼の上石)” でやったことになっているが、もちろんそんなことはない。それは概略以下のようなものであった。



上の図はラザフォードが原子核の破壊のことを発表した1919年の論文の中で使われているものである。まず、Dの部分に放射線のアルファ線を発する源となるラジウムCをおく。上に延びているのは空気を抜いたり、他のガスを入れたりするための管と弁で、ボックスの中は全体を真空状態にすることができる。ボックスの片側（図では右の方の蓋）には穴が空いており、この穴は薄い銀の箔（フォイル）を貼ってある（記号S）。その外側1～2ミリメートルの所に硫化亜鉛（zinc sulphide）のスクリーンを置く（記号F）。アルファ粒子や水素原子核は、銀のフォイルを通り抜けて、硫化亜鉛のスクリーンに当たってシンチレーション（scintillation）

つまり閃光を発生させる。

Using the excellent zinc sulphide screens, specially prepared by Mr. Glew, the scintillation due to a high-speed H atom appears as a fine brilliant star or point of light . . . . (Rutherford 541)

この星のように小さな点となって輝くシンチレーションをスクリーンの裏側（外側）から顕微鏡（記号M）で観察する（スクリーンはガラス製でそれに硫化亜鉛が薄く塗ってあり、それで後ろの方から光が見える）。かすかな光を観察するため実験室は薄暗くしておく。

ラザフォードは、銀のフォイルと硫化亜鉛のスクリーンの間に色々な金属箔を挟んだり、ボックスの中に色々な気体を入れて、シンチレーションの数の変化を測定した。ほとんどの場合シンチレーションの数は金属箔や気体の阻止能力、つまり、アルファ粒子が飛ぶのを邪魔する能力が上がるにつれて減少したが、乾燥した空気、そして窒素を実験器具の中に入れた時、逆にシンチレーションの数が増えた（ワインバーグ 173）。こうした実験を積み重ねた結果、ラザフォードは次のように結論する。

From the results so far obtained it is difficult to avoid the conclusion that the long-range atoms arising from collision of  $\alpha$  particles with nitrogen are not nitrogen atoms but probably atoms of hydrogen, or atoms of mass 2. If this be the case, we must conclude that the nitrogen atom is disintegrated under the intense forces developed in a close collision with a swift  $\alpha$  particle, and that the hydrogen atom which is liberated formed a constituent part of the nitrogen nucleus. . . . The result as the whole suggest that, if  $\alpha$  particle — or similar projectiles — of still greater energy were available for experiment, we might expect to break down the nucleus structure of many of the lighter atoms. (Rutherford 586 – 87)



簡単にまとめれば、ラザフォードの実験で起こっていたことは、ラジウムCから放射されたアルファ粒子が窒素原子核に衝突し、水素原子核すなわち質量2の原子核をたたき出す。それが硫化亜鉛のスクリーンに当たって、星のように発光するということである。ちなみに、この実験では音は生じない。従って、テキスト中の雷、大爆発のイメージは、『フィネガンズ・ウェイク』の中で歴史のサイクルを更新する雷、そしてまた後で言及する原子爆弾のイメージがその主要な出所である。

## 分裂, 融合, 原子爆弾

ラザフォードの実験では、アルファ粒子が窒素原子核にぶつかって、窒素原子核から質量2の原子核つまり水素原子核が飛び出している。これは核の分裂 (fission) にほかならない。ジョイスが353ページ26行目の“general uttermosts confussion”で、“fission”という言葉の響きを“confusion”に入れた時、少なくともラザフォードのこの実験が念頭にあったのは間違いない。

しかし、この実験で起こるのは分裂だけではない。1919年の論文ではそこまではっきり書いていないが、分裂だけではなく融合 (fusion) も起こっていた。実験装置の中で起こっていたことは、別の言い方をすれば、質量4のアルファ粒子が質量14の窒素原子核の中に飛び込んで、質量2の水素原子核をたたき出し、質量16の酸素原子核が残るという反応である。つまり、分裂と融合が同時に起こる (正確にはアルファ粒子のぶつかり方により色々なケースがあるが、おおまかな概念としてはそう考えていい)。従って、テキストの中で“confusion”の“fusion (融合)”の部分に fission (分裂) が上書きされて、両者がテキスト上でも同時に起こっているのは実に適切と言わなくてはならない。ジョイスがこのことをはっきり意識して書いたかどうかは即断できないが (文脈的に fusion の意味を込めているのは疑いない)、少なくともテキストがうまく原子核破壊実験の時に起きていた原子核反応の実態を捉えているということは確かであ

る。

さて、今述べた核分裂 (fission) の方に関して、Mitchell が言っていることを一つ訂正しておきたい。我々が今核分裂と言ったとき連想するのは、原子爆弾の元になるウランの核分裂である。この核分裂は最初 Hahn と Stassman が発見した。Mitchell は Hahn と Stassman の核分裂の発見を「1938年」とし (Mitchell は “accomplished” という言葉を使っている)、“If in ‘confussion’ Joyce included ‘fission’ it might well have been the result of the latest world news.” と言ってる (Mitchell 99)。しかし、確認してみると、この核分裂の発見は1938年の末 (『ブリタニカ』大項目第6巻691, 『20世紀の物理学』第一巻137-39, 同第二巻565), 発表は1939年の1月である<sup>3)</sup>。翻って、『フィネガンズ・ウェイク』の該当箇所は、*James Joyce Archive* によれば、1938年の早い段階に書き込まれており (*JJA* 55 133, 186), 『フィネガンズ・ウェイク』自体も1938年の11月13日までには完成していた (Ellmann, *James Joyce* 714)。そうだとすれば、“If in ‘confussion’ Joyce included ‘fission’ it might well have been the result of the latest world news” という Mitchell の推測は的はずれということになる。ジョイスがこの箇所を書いた時、まず念頭にあったのはラザフォードの原子核破壊実験だったと考えた方が妥当であろう。いずれにせよ、アーカイブ等の制作年月の記述が正しければ、ウランの核分裂の発見のニュースを受けてジョイスがこの箇所を書いたということは無かった、という点を確認しておきたい。

とはいえ、直接原子爆弾の開発につながっていくウランの核分裂の発見と関係ないからといって、テキストのこの箇所に原子爆弾のイメージがないかという、そういうわけでもない。もちろん本物の原子爆弾はまだ影も形もないが、この頃には原子爆弾 (atomic bomb) という言葉はすでにあって、それがとてつもない威力を持った爆弾であるということが言われていたからである。これは *OED* で “atomic” の項を引けばすぐに確認できる。

1914 H. G. Wells *World set Free* ii. 96 The three atomic bombs, the new bombs that would continue to explode indefinitely.

1917 S. Strunsky in *Yale Rev.* Jan. 295 When you can drop just one atomic bomb and wipe out Paris or Berlin, war will have become monstrous and impossible.

1925 *Punch* 11 Feb. 152/2 When, like the bursting of atomic bombs, Cats call to cats and Toms miaul to Toms.

1932 H. Nicolson *Public Faces* xii. 325 We must now assume that a single atomic bomb is capable of destroying all matter within a circumference of seventy to eighty miles from the point of explosion.

いくつか出ている彼の蔵書記録には残っていないが (Connolly, Ellmann *The Consciousness*, Gillespie), ジョイスは Wells の *World Set Free* あたりを読んでいたのかもしれない。上の引用からも暗示されるように、これは原子爆弾が大きな役割を果たす未来小説である。

### アルファ線, あるいはアルファ粒子

原子核破壊のくだりの最後の所で, “dawnybreak” (353. 32) という言葉が出てくる。これについては Halper が早い時期に簡潔で的確な説明をしている。

We're told that this is a “dawnybreak.” That is: is a Donnybrook. Also — a dawny-break. A rising of the sun. A rising of the Son. (Halper 425)

つまり, ここに夜明け (dawny-break) が出てくるのは, バックリーがロシア将軍を撃つというこの話が, 太陽 (son) / 息子 (sun) が昇る / 蜂起すること, 立ち上がること (rising) であるからということである。ジョイスをもってしなくとも sun と son をかけるのは極めて常套的な地口で

あるし、ジョイスがこの程度のことを意識せずを書くわけがないだろう。

このことをおさえた上でラザフォードの原子核破壊実験において原子核の破壊に使われたアルファ粒子に目を向けたい。アルファ粒子というのは質量4の原子核、つまりヘリウム (helium) 原子核である (それを確認したのはほかならぬラザフォードであった)。このことは、ジョイスが参照していたブリタニカ 11 版に載っており (*Britannica* Vol. 22, 800-01), おそらくジョイスも知っていたと考えられる。そして、ヘリウムという原子名は予想される通り、helios (太陽) に由来する。この命名は初めヘリウムが太陽の中に発見されたからである。ヘリウムの名前が helios から来ていることはやはりブリタニカ 11 版のヘリウムの項で知ることができるが、そのくらいのことはジョイスならすぐに当たりがついただろう。さて、そうすると、息子 (son) が父祖 Adam/atom を撃つ銃弾は、ヘリウム原子核、すなわち helios/sun (太陽) にちなんだ発射体であるということになり、son と sun をかけるというありふれた駄洒落を通して、原子核の破壊実験の話が父を撃ち殺す息子の物語とうまく結びついていくことになる。ジョイスがバックリーによるロシア將軍銃撃を原子核破壊実験と重ねた時、このことも彼の念頭にあったに違いない。

付け加えておくと、“dawnbreak in Aira” の箇所には“breakdown in air” (空中での破壊) という意味も込められ、アルファ粒子による原子核破壊のことにも言及しているだろう (“we might expect to *break down* the nucleus structure of many of the lighter atoms. (Rutherford 587) 斜体は筆者)。

## 閃 光

アルファ粒子やアルファ粒子によって窒素原子核から叩き出された水素原子核は、硫化亜鉛のスクリーンに当たって、星のように発光する。シンチレーションと呼ばれている現象である。原子核破壊のくだりには、このシンチレーションを意識して書かれていると考えられる点もある。

Similar scenatas are projectilised from Hullulullu, Bawlawayo, empyreal Raum and mordern Atems. (353. 29 – 30)

ここで動詞が “projected” ではなく “projectile (投射体)” を元にした “projectilised” となっているのは、原子核破壊実験でラジウム C から放射されるアルファ粒子や、窒素原子から叩き出される水素原子核のことを意識しているからなのは間違いない (“if  $\alpha$  particle — or similar *projectiles* — of still greater energy were available” (Rutherford 587) 斜体は筆者)。そして、これは投射されているだけではなく暗い空のスクリーンで無数の光の球になっている。というのも、この挿入場面の後でバットとタフの会話に戻ると、最初に口を開くタフがこんなことを言うからである。

Wharall thubulbs uptheaires! (354.1)

ここには “hubbub (騒ぎ, 騒動)” もかかっているが, McHugh の注にもあるとおり, “What are all the bulbs up in the air! (空に見えるあのたくさん電球はなんじゃあ!)” とも読める。何か(ここでは “scenatas” (senators > old men) だが) 投射されることによって生じた暗い夜空に輝く無数の光は、原子核破壊実験のシンチレーションを顕微鏡でのぞき込んだ時とイメージが重なっていく。

さらに言えば、この光は原子核破壊のくだりの中に出てくる雷のイメージと結びつき、Butt と Taff のスキット、つまり「バックリーはいかにしてロシア将軍を撃ったか」の最初の所に出てくる雷とも呼応していく: “All was flashing and krashning blurty moriartsky blutcherudd?” (338.8-9)。ここで雷雨の前兆で空が光っていることを言うために使われている “flash” という言葉は、シンチレーションの言い換えとしても使われる言葉である。例えば、ブリタニカ 11 版の  $\alpha$  粒子の性質について説明しているくだりが出てくるシンチレーションの説明では次のように表現されている。

This shows that each  $\alpha$  particle produces a visible *flash* of light when it falls on a suitable zinc sulphide screen. (*Britannica* Vol. 22, 801) (斜体は筆者)

しかしなにより、後の方で雷雨と原子核破壊実験が結びつけられているのだから (“the grosning (groza: ロシア語で雷雨の意)” (353. 23)), テキストを遡って読めばそう読むのがむしろ自然であろう。

そして実は、「バックリーはいかにしてロシア将軍を撃ったか」の出だしの部分をそう読むためには別にテキストを遡る必要もない。原子核破壊への言及は、“the abnihilisation” 以下のくだり以外にもはっきりと出てくるところが少なくとも一箇所ある。それは、「バックリーはいかにしてロシア将軍を撃ったか」のすこし前、333 ページの 25 行目である。

... her birthright pang that would *split an atom* like the forty pins in her hood. ... (333. 24 – 25) (斜体は筆者)

“split an atom” という原子核破壊実験への言及が前振りとして直前にあるのだから、「バックリーはいかにしてロシア将軍を撃ったか」の出だしの閃光の場面に原子核破壊実験のシンチレーションのイメージを読み取るのは、イメージの上にイメージを重ねて書かれている『フィネガンズ・ウェイク』の読解法として決して不自然なことではない。

さて、そういうことになれば、テキストの仕組み、あるいは仕掛けとして、バックリーがロシア将軍を撃つ挿話全体に原子核破壊実験のイメージがかぶさって行くということになるだろう。そして、前に述べたように、『フィネガンズ・ウェイク』の中では雷が重要な意味を持ち、作中何度も出てくる。ひょっとしたら、『フィネガンズ・ウェイク』を繰り返し読む読者が、雷や空が光る話のすべてでラザフォードの原子核破壊実験を意識することまで期待してジョイスは原子核破壊のくだり、そして、「バックリーはいかにしてロシア将軍を撃ったか」を書いていたのかも知れない。

以上、核の分裂・融合、アルファ粒子、シンチレーションという3つの

観点から、ラザフォードの原子核破壊実験と「バックリーはいかにしてロシア将軍を撃ったか」の関係について見直してきた。要は Mitchell が指摘している以上に、ラザフォードの原子核破壊実験が「バックリーはいかにしてロシア将軍を撃ったか」と深く、あるいは細かく結びついているのではないかということである。Mitchell も言っているように、atom/Adam/etym (on) を split (分割) する者としてジョイスが自分とラザフォードの対応関係を意識していたのは間違いない。しかしさらに言うなら、原子核破壊実験を意識して書いてあるこのくだりには、ラザフォード、そしてラザフォードに続いて各種の原子核破壊実験を行った核物理学者に対する、ジョイスのある種の親近感とともに、対抗心、自分は彼らに負けていないという強い自負の念も感じられる。確かにジョイスは負けなかった。核物理学者が原子核を分裂させてそこに潜在するエネルギーを大々的に開放するのはまだ先のことである<sup>4)</sup>。ジョイスは、言葉を一旦無意味な要素にまで分割 (split) するという手続によって、一足先に言葉の持つ潜在的なエネルギーを大々的に開放した。言うまでもなく、その実験結果が、“generaluttermosts confussion” の書、どこもかしこもこの上ない分裂と融合と混乱と大騒ぎの書、『フィネガンズ・ウェイク』である。

#### 注

- \* 本論は日本ジェイムズ・ジョイス協会第12回研究大会(2000年6月18日)で行われた『フィネガンズ・ウェイク』ワークショップの発表原稿、並びに Joycean Japan 第12号(2001年6月)誌上の同ワークショップ報告にテキスト語釈の補註として載せた原稿を元に加筆修正したものである。
- 1) 『フィネガンズ・ウェイク』は基本的に現存する全ての版でページと行が一致する。以下『フィネガンズ・ウェイク』の引用の後にページと行を示す。
  - 2) 次の“The abnihilisation”以下の引用と共に、より細かい語釈を論文末の補註に示す。
  - 3) この辺の経緯は少しややこしい。Hahn と Stassman は彼らの発見を1月に発表する時、核分裂という考えで発表するのを躊躇い、分裂という言葉を使わなかった。核分裂という発想で発表したのは Meitner と Frisch であり、彼らは1939年1月26日付けの論文を『ネーチャー』誌に送る。しかし、この論文が刊行される前にその内容を Bohr が学会で広めてし

まった（『科学と発見の年表』404-05）。

- 4) これによって人類が幸福になったか不幸になったかはまた別問題である。同じことが『フィネガンズ・ウェイク』についても言える，と思う。少なくともジョイス研究者にとっては。

## 引用文献

- Brewer's Dictionary of Phrase and Fable*, 14th Ed. by Ivor H. Evans. London: Cassell, 1989.
- Connolly, Thomas E. Ed. *The Personal Library of James Joyce*. 2nd Ed. New York: University of Buffalo, 1957.
- Ellmann, Richard. *James Joyce*. Rev. Ed. Oxford: Oxford UP, 1982.
- . *The Consciousness of Joyce*. London: Faber and Faber, 1977.
- Encyclopaedia Britannica*. 11th. Ed. New York: Encyclopaedia Britannica, Inc. 1910 - 1911.
- Gillespie, Michael Patrick. *Inverted Volumes Improperly Arranged: James Joyce and His Trieste Library*. Ann Arbor: UMI Research Press, 1983.
- Halper, Nathan. "James Joyce and the Russian General." *Partisan Review*, 18 (July, 1951): 424 - 31.
- James Joyce Archive* 55: *Finnegans Wake: Bk. II, Ch. 3, Drafts, TSS and Proofs*, Vol. 2. Ed. by Michael Groden et al. New York: Garland, 1978.
- Joyce, James. *Finnegans Wake*. 1939. London: Faber and Faber, 1957.
- McHugh, Roland. *Annotations to Finnegans Wake*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1991.
- Mitchell, Breon. "The Newer Alchemy: Lord Rutherford and *Finnegans Wake*." *A Wake Newslitter*. New Series. 3.5 (1966): 96 - 102.
- Oxford English Dictionary*. 2nd Ed. CD. Oxford: OUP, 1994.
- Rutherford, Ernest. "Collision of  $\alpha$  Particles with Light Atoms." *The London, Edinburgh, and Dublin Philosophical Magazine and Journal of Science*. Sixth Series. 37. 222 (June, 1919): 537 - 87.
- アシモフ, アイザック『科学と発見の年表』小山慶太・輪湖博訳(丸善, 1996)
- 『20世紀の物理学』「20世紀の物理学」編集委員会編(丸善, 1999)
- 『ブリタニカ国際大百科事典』(TBSブリタニカ, 1972)





**353.13: rattles in his arctic! As bold and as madhouse a bull in a meadows.**

牧場の雄牛みたいに大胆に、無我夢中で。

rattle ガラガラ, 大騒ぎ arctic ゴム製の防寒用半長オーバーシューズ Clontarf  
means Bull Meadow  
rat in his attic mad as (mad 気の狂ったような, ひどく興奮した)

**353.14: Knout Knittrick Kinkypeard! Olefoh, the sourd of foemoe**

Knout Knittrick Kinkypeard め! いにしえの剣のために!

Knout Knittrick Kinkypeard は Russian General のこと

knout むち (昔ロシアで革を編んで作った刑具) Oliver Moore: s O, For the  
Sword of Former Times

knit+trick kinky: 性的に倒錯した [air unknown]

KKK=Ku Klux Klan F sourd: deaf foe

Sitric Silkenbeard led Danes at Clontarf, 1014

**353.15: times! Unknun! For when meseemim, and tolfoklokken rolland**

人に知られず! というのも, 俺は見たのだ, 12時の鐘がごろごろと国中に響き,

Unknown (12時: 新しいサイクルの始まり, CadとHCEの出会いの時間(35))

when (I) seen him Da klokken tolv: 12 o'clock

s Klokke Roeland (about cathedral bell)

roll (雷が) ゴロゴロ鳴る

(歴史のサイクルの更新を告げる雷)

**353.16: allover ourloud's lande, beheaving up that sob of tunf for to**

奴が芝生を取り上げて

pr A Roland for an Oliver: 負けず劣らずやり合う heave (重い物を) (持ち) 上げる (lift);  
(声を) 苦しそうに出す

all over Ireland ('Old Sod') sod of turf: 芝, 芝土; 芝生 (turf)

all over Our Lord's land sob すすり泣き, むせぶような音

**353.17: claimhis, for to wollpimsolff, puddywhuck. Ay, and untuoning**

奴の尻をきれいにしようとしているのを, 奴の尻を拭こうとしているのを。そうだ, そして

clean his R pudavik: ロシアの古い重量単位: = 16.38 kg

I claimhe: itch かゆい, むずがゆい s Paddy Whack (paddy whack アイルランド人)

wipe himself undoing もとどおりにする, もとに戻す

G Wolle: wool intoning (祈禱文・賛美歌を) 吟唱する

…に抑揚をつける, 節をつけて言う

Fi tuoni: figure of Death It tuoni: thunders



**353.24 : of the grinder of the grunder of the first lord of hurtreford ex-**

grind: (臼で) ひく, すりつぶす

Rutherford splits the atom, 1919

G Grüder: founder 1931年バロンの爵位を受け 1st Baron Rutherford

of Nelson となる。“hurtreford” は Rutherford の  
アナグラム

Hurdle Ford (D)

**353.25 : polodotonates through Parsuralia with an ivanmorinthorrorumble**

パースネリア中で爆発的に生じ, 大音響を轟かせる。

explodes detonate Persse O'Reilly (HCE) Ivan the terrible terror

*Pharsalia* (ルカヌス (A. D. 39-65) の詩 *L mori: to die*

Thor rumble

Pharsalia: 古代ギリシアの Pharsalus を中心とする地域

(歴史のサイクルの更新を告げる雷)

Urals ウラル山脈

polonium (放射性元素) uranium (放射性金属元素) thorium (放射性金属元素)

**353.26 : fragoromboassity amidwhiches general uttermosts confussion are**

その中でこの上ない混乱が広く観察される。

fragor *It romgbazzo: uproar*

confusion / confession

amid which

fusion / fission fuss

**353.27 : perceivable moletons skaping with mulicules while coventry**

分子とともに原子が逃げ出し (金づちが分子を使って創造し), 田舎者が

*R molat: hammer*

molecule 分子

country bumpkins 野暮な田舎者

mole (化) モル ton (重量単位) トン

Coventry: England,

West Midlands の都市

-ton 「…なもの」の意

escape *N skape: to make, create***353.28 : plumpkins fairlygosmotherthemselves in the Landaunelegants**

ピカデリーの優雅さで身を包む

pumpkins

smother 包んでしまう, くるむ(in) London elegance of Piccadilly

plump

Fairy Godmother

Landau carriage (Cinderella's pumpkin)

(物質変化のモチーフ) (シンデレラは12時に魔法が切れる: 物質変化のモチーフ)

**353.29 : of Pinkadindy. Similar scenatas are projectilised from Hullululu,**

同様な場面がホノルル,

pinkindindies : c 18 D nocturnal senators (*L senex* = old, old man に由来) Honolulu  
 strollers ; slashed passers-by *It scenata* : scene project ululate  
 with their sword points sonata projectile 投射物, 発射体  
 (特に弾丸・ロケットなど)

**353.30 : Bawlawayo, empyreal Raum and mordern Atems. They were**

ブラワヨ, ローマ帝国, エジンバラから投射される。

Bulawayo ジンバブウェ南西部の都市 Modern Athens : Edinburgh  
 bawl G Raum : space  
*R balavayu* : I play pranks *G Mord* : murder atoms/Adam  
 Imperial Rome Atem : creator in Egyptian Book of the Dead  
 empyreane G Atem : breath

**353.31 : precisely the twelves of clocks, noon minutes, none seconds.**

時はまさに 12 時, 0 分 0 秒。

(12 時 : 新しいサイクルの始まり, Cad と HCE の出会いの時間 (35))

**353.32 : At someseat of Oldanelang's Konguerrig, by dawnybreak in**

一日中続いた戦争の日没の時間に (昔デーローの行われた王国のとある座席で), エールの夜明けまでに。

sunset all day long *Da Kongerige* : kingdom Donnybrook : district of D  
*F guerre* by daybreak  
 Danelagh : デーン法 (9-11 世紀ごろ breakdown in the air  
 イングランドのデーロー人の居住  
 地域に行なわれた法律), また同法の行われた地域)

**353.33 : Aira.]**

Eire (1937 年 Eire 誕生, 新憲法発布)

era